

財団法人 Karuizawa New Art Museum オープン記念

《開幕》 「軽井沢の風」展

日本の現代アート 1950—^{いま}現在

2012年4月27日（金）～9月2日（日）

（内覧会・記者会見 2012年4月25日）

開催概要

2012年陽春の候、軽井沢に新しい美術館、Karuizawa New Art Museum（軽井沢ニューアートミュージアム）がオープンします。

軽井沢ニューアートミュージアムでは、開館記念展として「軽井沢の風」展 日本の現代アート 1950—^{いま}現在」を開催いたします。本展はここ半世紀あまりの現代美術の分野において、国内外で評価されてきた作家および現在活躍中の作家に焦点を当て、これらを展望できる展覧会となります。

具体的には、1950年代の日本前衛アートの草分け的存在である岡本太郎、草間彌生、井上有一から、際立った個性で日本のみならず欧米諸国で再評価の高まっている「具体美術協会」の作家を展覧するとともに、これらに続く世代で日本の伝統を発展的に継承し、独自のオリジナリティを生み出している同時代のアーティストや建築家の作品も同時に展覧いたします。

本展は、日本の現代美術を新たな視点から捉える軽井沢ニューアートミュージアムの最初のメッセージとなります。



草間彌生《自己消滅》1966-74
ミクストメディア 168.0×400.0×300.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー



吉原治良《円》1971
油彩、キャンバス 45.5×53.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー

軽井沢ニューアートミュージアムとは

軽井沢が陽光に輝く4月、JR軽井沢駅から目抜き通りを真っ直ぐに7分あまりそぞろ歩いた通り沿いに、白亜の柱が印象的な美術館がオープンします。

この「軽井沢ニューアートミュージアム」は、主に日本の戦後から現在までの優れたアートを、新しい視点から日本の現代アートとして再領域化し、国際的な評価にたえうる諸作品を、広く国内外に普及してゆくことをミッションとして誕生しました。

企画展では、世界の第一線で活躍中の日本の現代アートの作家やそのグループ展だけでなく、海外作家も含めて、日本国内のみならず海外からの美術ファンの期待にも応えられるような斬新な切り口の展示を展開していきます。

また近年顕著に国際的な評価が高まっている「具体美術協会」に所属した前衛作家たちの作品など、日本の前衛作家の作品を積極的にコレクションしていく方針です。

美術館の設計は建築家・西森陸雄によるもので、総ガラス張りをベースに白樺林をイメージした白い柱をデザイン的に林立させた構造は、さわやかでファッショナブルな高原リゾート地・軽井沢に心地よく溶け込んでいます。この美術館は、2007年に商業施設として建てられたものを今回新たに美術館として内装のリニューアル工事を行いオープンするものです。施設は株式会社ホワイトストーンが所有し、財団法人Karuziwa New Art Museumが施設を賃借し、企画運営を行います。

軽井沢には美術館をはじめとして数多くの文化施設がありますが、そうした既存の文化施設、団体の方々とも協働し、軽井沢町を国際的な芸術文化の拠点としてさらなる繁栄へと導くことを目指します。

また、「軽井沢ニューアートミュージアム」は、上記の目的実現のため「軽井沢国際芸術文化都市推進協議会」（略称 KIAC）の後援を受け、地域と連携した様々な活動を展開していきます。



軽井沢ニューアートミュージアム外観（内装リニューアル工事前）

撮影：西川 公朗（Nishikawa Masao） 2007

※「軽井沢国際芸術文化都市推進協議会」（略称 KIAC）について

Promotional Council for Karuizawa, International City of Arts and Culture (KIAC)

軽井沢は京都に次ぐ観光都市で年間 800 万人の人が訪れています。来年以降、北陸新幹線（長野新幹線）が富山から関西方面へと開通したあかつきには、軽井沢の観光客は京都を超えて日本一になるといわれています。

昭和 26 年 8 月 15 日に制定された「軽井沢国際親善文化観光都市建設法」の第 1 条に次のようにその目的が記されています。

「この法律は、軽井沢町が世界において稀にみる高原美を有し、すぐれた保養地であり、国際親善に貢献した歴史の実績を有するにかんがみ、国際親善と国際文化の交流を盛んにして世界恒久平和の理想の達成に資するとともに、文化観光施設を整備充実して外客の誘致を図り、わが国の経済復興に寄与するため、同町を国際親善文化観光都市として建設することを目的とする。」その後、わが国は半世紀あまりを経て復興を遂げ、今や世界有数の経済大国になりました。21 世紀の日本は、芸術文化面においても世界をリードしていく立場にあると思います。

当協議会は軽井沢町に美術館をはじめとする数多くの文化施設を誘致し、日本国内のみならずアジアや欧米の観客を動員し、軽井沢をさらに充実した国際親善の名にふさわしい芸術文化都市に育て上げていくことを目的に新たに発足いたしました。

■「軽井沢ニューアートミュージアム」概要

名誉館長：

村田 慶之輔（川崎市岡本太郎美術館 名誉館長）

館長：

白石幸栄（株式会社シーマ代表取締役）

建物概要：

1階 企画展示室 1（246㎡）
ギャラリー1、2、3、4（266㎡）
ミュージアムレストラン（200㎡）
ミュージアムショップ（146㎡）

2階 常設展示室 1-1（73㎡）、1-2（153㎡）
企画展示室 2-1（144㎡）、2-2（136㎡）、3-1（150㎡）、3-2（211㎡）

※「軽井沢の風」展 日本の現代アート 1950—現在（企画展示室と常設展示室）1,113㎡

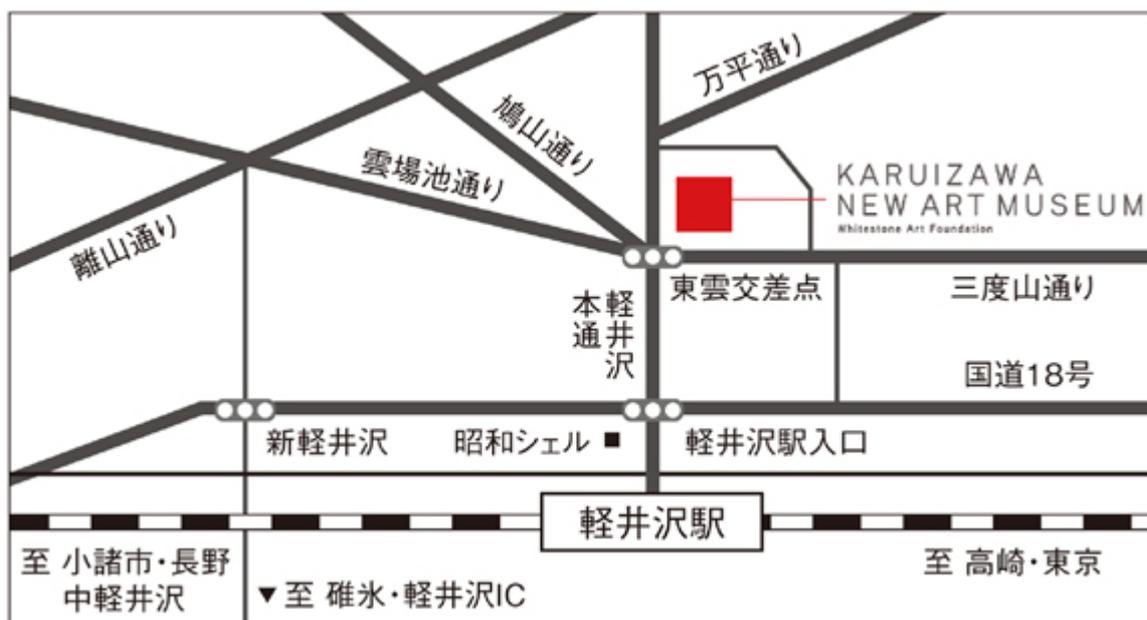
設計：Nishimori Architect & Associates

竣工：2007年4月

建築面積：1,737.29㎡

延床面積：2,918.25㎡

■「軽井沢ニューアートミュージアム」へのアクセス



JR東日本・しなの鉄道「軽井沢駅」から徒歩7分

Karuizawa New Art Museum（軽井沢ニューアートミュージアム）

〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町 1151-5

tel:0267-46-8691 fax:0267-46-8692 URL:www.knam.jp/

本展のみどころ

「具体」作品が放つ日本現代美術の尖鋭性を振りかえる

近年顕著に国際的評価が高まっている「具体美術協会」に所属した1950年代前衛作家たちの主要作品が集結。世界に知られる「Gutai」の尖鋭的な芸術運動を今の視点から振り返ります。

嶋本昭三、ライブパフォーマンスの現在形を目撃する

「具体美術協会」の創立会員にして「具体」という名の提案者であるアーティスト、嶋本昭三によるピン投げパフォーマンスが、軽井沢の地で実現します（4月25日（水）内覧会にて開催）。

現代美術の歴代の精鋭たちが軽井沢に集結する

現代美術は、その名のとおり現代に生きる私たちの生活とともにあるため、その歴史的な流れを俯瞰するには早すぎたり近すぎたりして、意外に概観しきれない面があります。

本展では、「具体美術協会」をはじめとした現代美術の代表的な精鋭たちの作品を文化の地軽井沢に集結させることで見えてくる、日本の現代美術の新たな流れを探ります。

岡本、草間、村上、松井、現代日本美術のエッジの系譜を探る

岡本太郎は、日本の現代美術の先端で活動を続け、メディアに翻弄されることなくむしろ翻弄したアーティストだったと言えます。アーティストとメディアの関係、メディアとしてのアーティスト等、現代に生きる上で必須となるアーティストのメディアとの関わり方について、先進例としての作家の作品がその答えを導き出します。

美術の領域に重なる建築家の仕事に触れる

伊東豊雄、隈研吾等、現代美術の流れの中で捉え直すことで見えてくる、建築的芸術、芸術的建築の可能性を探ります。

「軽井沢ニューアートミュージアム」の目指すもの

軽井沢から世界へ

今後の企画展では、世界の第一線で活躍中の日本の現代アートの作家の個展やグループ展はもちろん、海外作家も視野に入れ、日本国内のみならず海外からの美術ファンの期待にも応えられるようなグローバルな視点からの企画展示を行っていきます。

「具体」から現在へ

近年顕著に国際的評価が高まっている「具体美術協会」に所属した前衛作家たちの作品など、日本の前衛作家の作品を積極的にコレクション、展示していくとともに、「具体」の精神を今に引き継ぐ現在の作家たちの作品展示、新作展示も積極的に展開していきます。

現在から未来へ

1F ギャラリーでは、新進作家を中心に様々な個展を開催します。さらには芸術を志す学生等、未来を担う若い世代のための現在進行形のアートスペースとしての活動も展開していきます。

展覧会情報

タイトル：「軽井沢の風」展 日本の現代アート 1950—現在

会場：Karuizawa New Art Museum(軽井沢ニューアートミュージアム)

〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町 1151-5

tel:0267-46-8691 fax:0267-46-8692 URL:www.knam.jp/

会期：2012年4月27日(水)～9月2日(日)

※ 特別内覧会 4月25日(水) 午後2時～

前期：4月27日(金)～6月25日(月) / 後期：6月27日(水)～9月2日(日)

※ 前期と後期に展示替えをします。

※ 火曜日休館(祝日の場合はその翌日) 7月21日(土)～8月26日(日)は休館日なし

開館時間：4月～6月：午前10時～午後5時

(金曜・土曜は午後7時まで。入館は30分前まで)

：7月～9月：午前10時～午後6時

(金曜・土曜は午後9時まで。入館は30分前まで)

主催：財団法人 Karuizawa New Art Museum (軽井沢ニューアートミュージアム)

協力：川崎市岡本太郎美術館、尼崎市総合文化センター、UNAC

後援：長野県、長野県教育委員会、軽井沢町、信濃毎日新聞社、KIAC

企画：「軽井沢の風」展 実行委員会(青柳正規、村田慶之輔、千足信行、本江邦夫、
長谷川祐子、海上雅臣、松下計、金子美樹(敬称略))

出品アーティスト：井上有一、今井俊満、岡本太郎、斎藤義重、白髪一雄、菅井汲、田中敦子、

棟方志功、元永定正、山口長男、吉原治良

飯野一朗、伊東豊雄、上前智祐、北郷悟、絹谷幸二、

草間彌生、隈研吾、近藤哲雄、サイトウマコト、篠原有司男、嶋本昭三、

諏訪敦、千住博、松井冬子、松谷武判、宮廻正明、

宮島達男、宮田亮平、村上隆、李禹煥、他

観覧料：

期間	4月27日～ 5月31日	6月1日～7月20日、 8月27日～9月2日	7月21日～ 8月26日
一般	1,600円	1,900円	2,500円
65歳以上・高大生	1,200円	1,500円	1,900円
小中生	800円	1,000円	1,300円
未就学児	無料	無料	無料

※ 割引券 一般：500円引き、65歳以上・大高生：400円引き、小中生：300円引き

お問い合わせ：財団法人 Karuizawa New Art Museum (軽井沢ニューアートミュージアム)

広報：pr@knam.jp tel：0267-46-8691

主な出品アーティスト

草間彌生 Yayoi Kusama (1929-)

1929年、長野県松本市生まれ。10歳の頃より水玉と網模様をモチーフに幻想的な絵画を制作。57年渡米、巨大な平面作品、ソフトスカルプチャー、鏡や電飾を使った環境彫刻を発表する。60年代後半にはボディ・ペインティングなど多数のハプニングを行う。ヌード・ハプニングでは自身の身体に水玉を描き、それを星や地球に見立てて自己消滅を訴えた。ここにおいても草間の芸術創造のベースにあるのは、極大と極小のせめぎ合いの中での個としての存在の葛藤であると言える。

そうした問題意識を抱きながらも、一方で草間は愛すべき作品やモニュメンタルな環境彫刻なども数多く手掛けている。抽象表現主義からミニマルアートへの歴史的転換に寄与した世界を代表するアーティストである。

93年第45回ベネチア・ビエンナーレに代表作家として日本館初の個展を行う。98年ニューヨーク近代美術館などで大回顧展が開かれる。01年朝日賞受賞。04年「クサマトリックス」(森美術館)は52万人を動員。09年文化功労者に選定される。11年5月よりマドリードの国立ソフィア王妃芸術センターを皮切りにパリのボンピドー・センター、ロンドンのテート・モダン、ニューヨークのホイットニー美術館を巡回する大規模な個展を開催。

出品作品：



草間彌生《自己消滅》1966-74
ミクストメディア 168.0×400.0×300.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー

松井冬子 Fuyuko Matsui (1974-)

1974年、静岡県森町出身。2002年、東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻を卒業。2007年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画研究領域修了博士号(美術)取得。博士論文「知覚神経としての視覚によって覚醒される痛覚の不可避」同大学日本画専攻の女性としては初の博士号取得者となる。

主に絹本に岩絵具を用いて描く古典的な画法で、女性や花、その幽霊などを描き、内臓や身体器官もモチーフにしつつ、自己分析的に「痛み」「狂気」を絵画で追求する。

個展：

- 2005 「松井冬子展」成山画廊(東京)
- 2007 「Narcissus」成山画廊(東京)
- 2008 「松井冬子展」平野美術館(静岡)
- 2009 「下図展」成山画廊(東京)
- 2010 「松井冬子展」Galerie DA-END(パリ)
- 2011 「松井冬子 東日本大震災 被災地支援オークション」成山画廊(東京)
- 2011 「松井冬子展 世界中の子と友達になれる」横浜美術館(神奈川)

受賞歴：

- 2006 佐藤美術館奨学生優秀賞 受賞
- 2006 VOGUE JAPON 2006 WOMEN OF THE YEAR 受賞
- 2006 THE BEST DEBUTANT OF THE YEAR アート部門 受賞
- 2007 東京芸術大学卒業修了制作 野村賞 受賞
- 2008 平成20年度 静岡県文化奨励賞 受賞

出品作品：



松井冬子《従順と無垢の行進》2010
絹本着色 128.0×161.0
所蔵：成山画廊

主な出品アーティスト

吉原治良 Jiro Yoshihara (1905-1972)

吉原治良は画家であるとともに、多くの優秀な作家を擁した「具体」という美術運動の指導者であり、さらに製油会社の社長という実業家でもあった。吉原が画家となったきっかけは藤田嗣治との出会いであった。藤田に自分の作品を見てもらった時に「他人の影響がありすぎる」と批判されたことは、のちに「他人の真似はするな」と「具体のメンバーに口癖のように言うことへとつながっていく。

画家としての吉原は、1934年の二科展に5点初入選というデビューを飾り、以後二科展を中心にシュールレアリスムと抽象という、20世紀絵画の二つの重要な潮流の系譜に属する作品を発表する。その後第二次大戦の体験を踏まえて、人間をイメージした作品を制作した後、1954年に彼を慕う若い作家たちと「具体美術協会」を立ち上げる。

この頃から吉原の作品は、画家の肉体と絵具やキャンバスという物質との直接的なかかわり合いそれ自体を強調し、絵具が物質としてそれ自体のこぼれを語り絶叫しているようなダイナミックなものとなる。それは1957年に来日したアンフォルメルの主唱者で美術評論家のミシェル・タピエらにいち早く注目されることとなったが、吉原の活動はアンフォルメルなどの影響によるものではなく、あくまで彼自身の創意によるものであった。

1962年頃からは一連の円の作品が展開され、色彩と造形という表現手段を厳しく限定しながら、そこに無限に複雑な変化と、すべてを包摂しつつ拡散する緊張感にあふれた作品を発表した。

出品作品：



吉原治良《円》1971
油彩、キャンバス 45.5×53.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー

元永定正 Ssadamasa Motonaga (1922-2011)

1955年に吉原治良らが組織した「真夏の太陽にいどむ野外モダンアート実験展」に出品した元永は、吉原に評価されて具体美術協会に参加し、以後、白髪や田中らと並び称される看板作家となった。

具体時代の元永は原色の絵具をキャンバスの上に流し、水墨の「たらしこみ」を応用した作品で一躍注目を集めた。それは偶然にできたアンフォルメル絵画のようでありながら、メモ段階でじっくりと構想が練られたコントロールされた作品であった。

元永は1966年にニューヨークに渡り、これを契機にエアブラシを用いた技法へと転じ、画面にグラデーションが導入されて色彩もより明快になった。描かれたかたちは原始的な生命体や、はたまた UFO を想起させる宇宙の生命体などを連想させたりするが、その奇妙な浮遊感はユーモアの感覚に満ち、健康的でありながらナンセンスな笑いを惹起するものである。

「人生、一寸先は光」と語る元永の作品は、その楽天主義で人を和ませ、リズムカルな軽快さで、鑑賞者に生命の躍動を喚起し続ける。作品のアイデアは自然の観察から生まれることが多いという元永は、絵画だけでなくさまざまな領域で作品を発表した多作な作家として国際的に高く評価されている。

出品作品：



元永定正《作品 1965》1965
油性合成樹脂塗料、キャンバス 184.0×230.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー

主な出品アーティスト

岡本太郎 Taro Okamoto (1911-1996)

神奈川県生まれ、東京青山育ち。東京美術学校洋画科（東京芸大）を半年で中退し、1929（S14）父のロンドン軍縮会議取材に伴い、両親と共に渡欧し、そのまま単身パリのソルボンヌ大学哲学科に留学した。ピカソに影響されるが、シュルレアリスムに関わったことでさらに傾斜した。パリには11年間滞在したが、'40ドイツ軍のフランス侵攻を受け帰国。帰国後、二科会に参加。'42~'45 陸軍二等兵として召集され中国に出征。'47 平野（岡本）敏子（同輩）と出会う。敏子は後に養女となった。

'48 阿部公房、花田清輝、埴谷雄高らと「夜の会」を結成。'52 東京国立博物館にて見た、縄文土器の強烈な表現に不思議なモノを感じ、また沖縄の魅力にも影響を受けた。アヴァンギャルド芸術、対極主義を主張し、『夜明け』『重工業』『森の掟』等の問題作を次々に発表。以後、他国で個展を開くようになる。

'54 現代芸術研究所を設立し、『今日の芸術』刊行。'56 旧東京都庁舎に『日の壁』『月の壁』など11の陶板レリーフを制作。'61 二科会を脱退。'67 日本万国博のテーマ展示プロデューサーになり『太陽の塔』を制作（'70 大阪万国博覧会）。他に、『こどもの樹』『母の塔（原作）』『座る事を拒否する椅子』など、平面・立体作品を数多く残し、文筆活動も精力的に行った。

後年はTVなどメディアへの露出も多く、「芸術は爆発だ」のCMで庶民的にも知名度は高い。80歳頃からパーキンソン病を患い、急性呼吸不全のため慶応義塾大学病院にて逝去。享年84歳。

出品作品：



岡本太郎《縄文人<立体>》1982
繊維強化プラスチック 158.0×150.0×120.0
所蔵：川崎市岡本太郎美術館

千住博 Hiroshi Senju (1958-)

千住博は1995年のヴェネツィア・ビエンナーレの絵画部門で優秀賞を受賞した。それ以後「滝の千住」として国際的に認知され、日本のみならず海外でも高い評価を受けてきている。

千住は中国の宋元画の圧倒的な空間表現と、第二次大戦後のアメリカの抽象表現主義の絵画を見据えたうえで、自然とともに生きる現代の日本人として、日本の伝統に立脚したうえでの斬新な表現を追究してきた。

滝や波や雲や崖などに仮託して、人知を超えた大いなる自然を天然の素材を用いて描く手法は、アンドレ・マルローの言う「サクレ」の描出であり、バーネット・ニューマンによって再提起された「崇高」に対する現代の日本人による応答である。

彼の表現における主たる関心事は、この時間と空間を、すなわちこの宇宙をどのようにとらえるかという、存在の根源への探求である。それにより、水や岩や木や大気といった最小限の構成要素で、遠大な宇宙を表現する作品を生み出してきた。それは、時間とともに移りゆく無常の世界こそこの世の真実であり、そこにこそ美を見出しうるといふ確信の表白となっている。

2011年には軽井沢の地に個人美術館を開館し、APECでのホスト画家として大任を果たし、日本の古刹大徳寺聚光院の襖絵の奉納も間近に控え、世界的に活躍している画家である。

出品作品：



千住博《ザ・フォールズ》2000
紙本着色 116.7×363.6
所蔵：ホワイトストーンギャラリー

主な出品アーティスト

宮廻 正明 Masaaki Miyasako (1951-)

宮廻正明は初めにデザインを学び、その後文化財の保存修復を研究する中で、独自の技法による日本画の世界を築き上げた。宮廻は裏彩色という古典技法を現代によみがえらせ、和紙の表から以上に裏からも描き加え、味わい深い画面を醸成することに成功している。

宮廻は常に時空間をゆったりと捉えたいうで、鮮やかな造形感覚で宇宙のリズムと合致した作品を描き上げる。漁師の投網を表現した作品では、一瞬である現在を永遠に画面に定着せんとし、周囲の空気と水に無尽蔵の過去と未来を包蔵させて、一刻がいかにかと尊いかということ表現している。

世界的に見ても高水準であった江戸の美術の特質を今も尊重しつつ、紛れもなく現代絵画の最先端を追究している宮廻の画業は、日本発のコンテンポラリー・アートとして世界的なクリスティーズ・オークション等でも高額落札され、西欧諸国でも質の高いコレクターの支持者を広げている。モスクワやサンクトペテルブルグでの展覧会の成功は、パリの国立ギメ東洋美術館における展覧会開催へとつながった。

過去をマイナス、現在をゼロ、未来をプラスとした時間軸の中で、宮廻は無数のマイナスと無限のプラスを内包する集積としてのゼロを、いかに豊かに表現するかに心を砕く。それは特異な位置を打ち立てようと苦慮してきた西欧近代の美術に対する、日本からの独自のコンセプトの提示となっている。

出品作品：



宮廻正明《水花火》2012
紙本着色 \$%\$ \$) %!\$
所蔵：ホワイトストーンギャラリー

サイトウマコト Makoto Saitoh (1952-)

1952年福岡県出身。78年の衝撃的なデビュー以来、国内外で注目され、日本、アメリカ、ヨーロッパ、南米などでデザイナーとして驚異的な受賞歴を持つ。グラフィック作品は、MoMA, NYをはじめ世界30以上の美術館にコレクションされており、SF MoMAでは80点ほどを所蔵。1990年代半ばよりデザイン活動の傍ら絵画の研究を始め、作品の原型を創り始める。

近年新しい表現方法を用いた絵画制作を始め、人間のイメージを大胆に解体、再構築を試みる。2008年8月、金沢21世紀美術館での個展を絵画作品初の発表の場とし、新たに画家としてスタートする。それ以来、いきなり、ヨーロッパ、アメリカのサザビーなどのアートマーケットで2000万から3500万円で取引され、注目されている。

出品作品：



サイトウマコト《Fellini 向かい合う顔》2011-12
アクリル・油彩、キャンバス 214.0×158.0
所蔵：サイトウマコトオフィス

主な出品アーティスト

諏訪敦 Atsushi Suwa (1967-)

1967年北海道生まれ、1992年に武蔵野美術大学大学院造形研究科修了。1994年には文化庁派遣芸術家在外研修員としてスペインに在住、

彼の地で参加した国際絵画コンペで大賞を受賞し本格的に活動を開始。帰国後、前衛舞踏の先駆者として知られる大野一雄、慶人親子の協力を得て、一年間取材し描いた連作(2000年)を発表、これを契機に古典的な意味での写真表現から次第に離れ、個展でのシリーズ作品発表へと活動の中心が移っていった。

主な個展：

- 1994 「レスポワール選抜企画展」(銀座スルガ台画廊)
- 2000 「大野一雄・慶人」(日本橋三越本店)
- 2003 「JAPANESE BEAUTY」(ナカジマアート)
- 2006 「SLEEPERS」(ナカジマアート)
- 2007 「ふたたびあいまみえ 舞踏家・大野一雄」(Gallery Milieu)、「SLEEPERS 3.0」(第17回 東美特別展・東京美術倶楽部/彩鳳堂画廊)
- 2008 諏訪敦絵画作品展 複眼リアリスト(佐藤美術館)
- 2011 諏訪敦絵画作品展 ～ どうせなにもみえない ～ (諏訪市美術館)、諏訪敦絵画作品展～蓮托生～ (成山画廊)

著作『諏訪敦絵画作品集 1995-2005』

／求龍堂刊 (ISBN4-7630-0518-9 C0071)

便利堂 コロタイプ ポートフォリオシリーズ

『半眼 HANGWAN』／便利堂刊 など

出品作品(予定)：



諏訪敦《Untitled》2007-10
油彩、板 130.3 × 324.0
所蔵：作家蔵

隈研吾 Kengo Kuma (1954-)

1954年横浜生まれ。1979年東京大学建築学科大学院修了。コロンビア大学客員研究員を経て、2001年より慶應義塾大学教授。2009年より東京大学教授。1997年「森舞台/登米町伝統芸能伝承館」で日本建築学会賞受賞、同年「水/ガラス」でアメリカ建築家協会ベネディクタス賞受賞。2002年「那珂川町馬頭広重美術館」をはじめとする木の建築でフィンランドよりスピリット・オブ・ネイチャー 国際木の建築賞受賞。2010年「根津美術館」で毎日芸術賞受賞。作品にサントリー美術館、根津美術館。著書に「自然な建築」(岩波新書)「負ける建築」(岩波書店)「新・ムラ論 TOKYO」(集英社新書)など、多数。

工業化社会の建築的理念であるインターナショナリズムにかわる、「場所に根ざした建築」の可能性を追求し実践している。

日本では歌舞伎座の建て替えプロジェクトが進行中。海外ではイギリスのヴィクトリア&アルバートミュージアムのスコットランド分館、スペイン・グラナダのオペラ劇場、フランス・マルセイユのFRAC(地域現代美術財団)などが進行中。

出品作品：



Kengo Kuma and Associates & AH y Asociados
《Granada Performing Arts Centre. Competition, First Prize》

写真提供：隈研吾建築設計事務所

関連イベント

1. 内覧会・レセプション

日 程：2012年4月25日(水)

場 所：Karuzawa New Art Museum（軽井沢ニューアートミュージアム）

〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町 1151-5

tel:0267-46-8691 fax:0267-46-8692 URL:www.knam.jp/

スケジュール：13:30 プレスツアー受付開始

14:00 プレスツアー

14:30 記者会見

15:00 一般内覧 開始、嶋本昭三氏によるパフォーマンス

16:00 オープニングセレモニー&パーティー

17:30 終了

2. 開館式

日 程：2012年4月27日(金) 午前10時～

場 所：Karuzawa New Art Museum（軽井沢ニューアートミュージアム）

〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町 1151-5

tel:0267-46-8691 fax:0267-46-8692 URL:www.knam.jp/

3. サタデーイベントプログラム

毎週土曜日の午後4時から午後6時までをイベントプログラムとして、レクチャー、ワークショップ、コンサート、パーティ等を開催予定です。

広報用画像

広報用画像として、以下の10点をご用意しています。

掲載ご希望の方はお手数ですが、別紙にご記入の上、FAXもしくはメールにてご連絡ください。



① 草間彌生《自己消滅<立体>》1966-1974
ミクストメディア 168.0×400.0×300.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー



② 松井冬子《従順と無垢の行進》2010
絹本着色 128.0×161.0
所蔵：成山画廊



③ 吉原治良《円》1971
油彩、キャンバス 45.5×53.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー



④ 元永定正《作品 1965》1965
油性合成樹脂塗料、キャンバス 184.0×230.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー



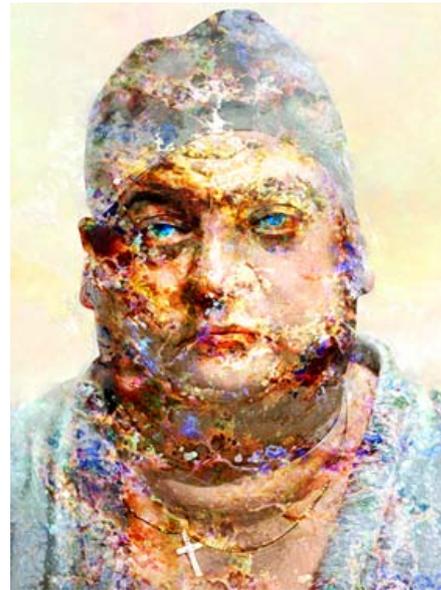
⑤ 岡本太郎《縄文人<立体>》1982
繊維強化プラスチック
158.0×150.0×120.0
所蔵：川崎市岡本太郎美術館



⑥ 千住博《ザ・フォールズ》2000
紙本着色
116.7×363.6
所蔵：ホワイトストーンギャラリー



⑦ 宮廻正明《水花火》2012
紙本着色 53.0×45.5
所蔵：ホワイトストーンギャラリー



⑧ サイトウマコト《Fellini 向かい合う顔》2011-12
アクリル・油彩、キャンバス 214.0×158.0
所蔵：サイトウマコトオフィス



⑨ 譚訪敦《Untitled》 2007-10
油彩、板 130.3 × 324.0
所蔵：作家蔵



⑩ Kengo Kuma and Associates & AH y Asociados
《Granada Performing Arts Centre, Competition, First Prize》
写真：隈研吾建築設計事務所

広報用画像申込書

本展覧会広報用素材として、作品画像 10 点（13、14 ページ参照）をご用意しております。
ご希望の際は、下記申込用紙に必要事項を記入の上、ファックスまたは E メールにてお申込みください。
なお写真の使用に際し、以下の点をご注意ください。

- ① キャプションは、作家名、作品名、制作年、所蔵先あるいは写真提供者を必ず表記ください。
- ② 作品のトリミング、文字載せはお控えください。

本展記事を紹介いただく場合には、恐れ入りますが情報確認のため、校正の段階でお見せいただきますよう宜しくお願いいたします。また、読者様・視聴者様へのプレゼント用招待券を 10 名様までをご用意しておりますので、ご希望の場合はお申し付けください。

財団法人 Karuizawa New Art Museum 行

FAX

0267-46-8692
TEL.0267-46-8691

E メール送付先：pr@knam.jp

※□に✓をご記入ください。

媒体名	種別： □TV □ラジオ □新聞 □雑誌 □フリー ペーパー □ネット媒体 □携帯媒体 □その他	発売・放送予定日 年 月 日
ご担当者名	ご住所 〒	
電話番号 ()	FAX 番号 ()	メールアドレス @

図版番号：ご希望の図版番号に✓をおつけください。

- ① 草間彌生《自己消滅》1966-74 ミクストメディア 168.0×400.0×300.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー
- ② 松井冬子《従順と無垢の行進》2010 絹本着色 128.0×161.0 所蔵：成山画廊
- ③ 吉原治良《円》1971 油彩、キャンバス 45.5×53.0 所蔵：ホワイトストーンギャラリー
- ④ 元永定正《作品 1965》1965 油性合成樹脂塗料、キャンバス 184.0×230.0
所蔵：ホワイトストーンギャラリー
- ⑤ 岡本太郎《縄文人》1982 繊維強化プラスチック 158.0×150.0×120.0
所蔵：川崎市岡本太郎美術館
- ⑥ 千住博《ザ・フォールズ》2000 紙本着色 116.7×363.6 所蔵：ホワイトストーンギャラリー
- ⑦ 宮廻正明《水花火》2012 紙本着色 53.0×45.5 所蔵：ホワイトストーンギャラリー
- ⑧ サイトウマコト《Fellini 向かい合う顔》2011-12 アクリル・油彩、キャンバス 214.0×158.0
所蔵：サイトウマコトオフィス
- ⑨ 諏訪敦《Untitled》2007-10 油彩、板 130.3 × 324.0 所蔵：作家蔵
- ⑩ Kengo Kuma and Associates & AH y Asociados 《Granada Performing Arts Centre. Competition, First Prize》写真：隈研吾建築設計事務所

読者様プレゼント用招待券をご希望の場合は、✓をおつけください。

- 5名様 | 10名様